

太宰府の文華く公文書館だより

132

古代山城と大宰府(3)

さんじょう

ページID: 7241

今回も、昨年の11月号に続き、古代山城について考えてみましょう。

従来、古代山城の分類には朝鮮式山城と神籠石系山城（こうごいし）とがあり、近年これらを総称して古代山城と呼ぶことが一般化してきたことは前回ふれました。このことは朝鮮式、神籠石系の分類が必ずしも有効な方法ではなかったことを示しています。

それでは朝鮮式・神籠石系に代わる分類の仕方はあるのでしょうか。ひとつは嶮山城類（けんさんじょう）・緩山城類（かんさんじょう）という分け方です。これは選地（どんな場所を山城の立地として選んでいるか）による分類といえます。「嶮（けん）」は嶮（けん）しい、「緩」は緩やかの意味です。単純には嶮山城類は高い所に築かれた山城、緩山城類は低い場所に築かれた山城といえそうです。

選地による分類を念頭において、北部九州に展開する神籠石系山城とされているものを踏査してみましか。実際に現地を訪れてみると、たとえば史跡おつば山神籠石（おつばやま）（山城・佐賀県武雄市）、史跡鹿毛馬神籠石（かののうま）（鹿毛馬城・飯塚市）などで

は、立派な水門跡が確認されています。水門は城内の雨水などを外に排出するためですから、山城のなかでも最も低い場所にあります。先の二つの山城では、水門はほぼ周囲の平地と同じ高さに設けられており（周囲との比高差0m）、典型的な緩山城といえます。北部九州の山城にはこのような例が多いのですが、一方で史跡御所ヶ谷神籠石（ごしょがたに）（御所ヶ谷城・行橋市）は嶮山城類に入り、城内では規模の大きな中門跡も確認されています。神籠石系山城といえどもそのありかたは決して一様ではないのです。

また古代山城を守固城型（しゆこじょうがた）、前線基地形（ぜんせんき）に分類することもあります。これは先の嶮山城・緩山城に対応しており、その築城目的が異なることを明らかにした考え方の一つといえるでしょう。

このように古代山城については、前回述べた、いつ築城されたのか、その主体はだれかの問題に加えて、それぞれの築城目的にも注目すべきと考えます。